

アマダイ通信NO.43

(Tile fish network letter)

04年夾竹桃咲く頃

知人・友人各位

梅雨の日本を離れ、タイ北部チェンマイのホテルでキーボードを叩いています。チェンマイの更に北、黄金の三角地帯のチェンライの更に田舎で、学校に行けない子供を預かり通学させる就学支援施設バーンサンラックを運営する藤井由美さんに、読者の皆様から寄せられた支援金を届ける途中です。沢山のご支援、ありがとうございました。

◎雨のハノイでホーチミンに会う

平成の市町村合併も佳境に入り、故郷八森町も近隣町村と一緒に能代市と合併する運びとなり、昭和の大合併で消えた岩館村の名を冠した小学校も、生徒数減少から廃校になるとのこと。●の同期生は1学級だが40人おり、一年下は2学級で60人いた。それが今年の1年生は2人だけとか。文字通り隔世の感だ。岩館小学校卒業生として●は、三菱重工OBで十歳ほど上の石嶋喜直先輩に続き二人目の東大生だが、三人目は現れないことになる。東大入学の66年頃は高度経済成長の恩恵も秋田の寒村まで十分に及ばず、一升の米を貸し借りし、風呂も貰い湯の家もあり、赤貧洗うが如しで、中学卒業で集団就職する仲間も多かった。間違えて東大法学部に入った●は素直にエリートコースを歩めず、貧富の差、階級のない社会を創ろうと学生運動に身を投じた。折からベトナム反戦闘争、大学闘争が盛り上がり、寮の自治委員長をするなど“活躍”。警察にも7回捕まり、未決で中野刑務所に足掛け3年入る。

そんな“凶状持ち”でも40歳でサラリーマンを始め、建築関係のメーカーの営業で各県庁、県警本部や霞が関の庁舎、NTT、JR等のビル建築現場に出入り、成果を上げる。かつての同期生や仲間達も●の“更正”、“敗者復活”を応援してくれるが、サラリーマンも10年しか勤まらず、50才で独立。古巣の高層ビルのコンクリート製外壁パネルの高橋カーテンウォールや日本ビクター、ホーチキなど10数社の営業顧問として建築資材を中心に全国を売り回る。独立してどうにか商売も軌道に乗ると、来し方、行く末が気になる。人生で欠けている部分も埋めたい。年に数回外国にも足を運ぶ。“師”と仰いだレーニンや毛沢東、ホーチミンにも会いたい。

五月の連休は娘とハノイに飛ぶ。雨期には少し早いが到着の夜から大雨、翌朝も音を立てて降り続く。ホーおじさんは朝が早い。11時には昼寝する。ガイドの案内で、川のようになったメインストリートに雨合羽のバイクの大群と競走するように、車でホーチミン廟に向かう。大雨なのに入り口はお上りさんの観光バスで一杯だ。池のようになった広場を裸足になったり、背負われたりして、ホーおじさんに会おうと必死だ。折り畳み傘をさし、くるぶしまで水に浸かり並ぶ。だが、順番が来ても柵の中に入れてもらえない。●の短パンがいけないという。いつも長い顎鬚に黒い上っ張りとお黒ズボン、廃タイヤで作ったホーチミンサンダルのスタイルで生涯独身のホーおじさんは、茶髪にジーンズのパンツの娘●ではなく、父●の毛脛に心乱されるのか？頭の固い後継者達に苦笑いしているに違いない。翌日は自由行動日、雨模様だが再度トライ。言葉の通じない街でタクシーを拾い身振り手振り、ようやく11時の閉門ギリギリに滑り込む。

◎世界の農村は世界の都市を包囲したか？

透明な棺の中で赤い光を浴びながら、ホーおじさんは穏やかに眠る。口では個人崇拜を否定しながら毛語録をかざし、東方紅を歌わせた毛沢東と違い、きっと苦々しく思っているに違いない。それとも死んでも“働ける”ことに喜びを感じているのだろうか。棺を一周りし考える。フランス留学帰りのインドシナ共産党の若き指導者としてフランス、次いでアメリカと戦い、ベトナムの独立と統一の偉業を成し遂げたホーチミン。時あたかも、欧米列強に植民地化されていたアジア・アフリカ諸国が民族解放の旗を立てて戦い独立を達成、もう一方の手には社会主義の赤い旗が握られ、世界中で社会主義革命の炎が燎原の火のように燃え盛っていた。その時毛沢東が叫ぶ、“世界の農村が世界の都市を包囲する”と。ロシアでもない、中国でもない、ある程度進んだ資本主義経済と民主的政治制度を持つ国、日本における社会主義革命は如何にあるべきか？思い悩む若き●に天の声のように響く。

先進資本主義国（世界の都市）でもない、社会主義国でもない“第三世界”（世界の農村）の民族解放・社会主義革命の運動と連帯することでこそ、日本の社会主義革命の突破口が開ける！今や世界システムとして広がった資本主義の“弱い環”としての第三世界の社会主義化で、資本主義のシステム全体が破綻する。世界の農村が世界の都市を包囲することで、終に世界革命が実現する！貧富の差も、階級もない、“能力に応じて働き、必要に応じて取る”ことのできる、“究極の社会主義”としての共産主義社会は世界革命としてのみ実現できる！そこでは他人の喜びを我が喜びとする人間像が実現する！万人は一人のために、一人は万人のために！国際連帯を！アメリカ帝国主義のベトナム侵略反対！若者は犠牲を恐れず猪突猛進する。

熱帯の灼熱の大地も雨で冷やされ、青空がのぞき心地よい風が吹くハノイの街を、戦争博物館を探して娘と歩く。沢山の砲や戦車、ヘリコプターの残骸、兵供の夢の跡がこれでもか、これでもかと展示されている。お婆ちゃん達の人だかりの山がある。女性兵士の戦いの展示コーナーだ。写真を指差し涙ぐむ者もいる。女達も又、ツワモノだったのだ。沢山の展示棟の中の国際連帯の棟を目指す。若き日本の兵達はどう評価されているのか？建物の中は暗く、入り口の錠には埃が積もっている。ハノイの雨は●の胸にも染みる。

感傷を吹き飛ばすかのようにハノイの街にはバイクの音が炸裂する。乗れ！乗れ！と輪タクやバイクがうるさい。公園の屋台で緋をすするカップル、天秤棒の男が風鈴の音を響かせ、路上で南京袋の豆を秤売りする女。東南アジア特有の猥雑さと活気が街を覆い、男も女も、老いも若きも皆、商売熱心だ。ホーおじさんが逝き、レ・ズアンやチュオン・チン、ボーゲン・ザップなどの革命第一世代も退き、中国の改革・開放政策を追いかけるかのようにドイモイ（刷新）政策で市場経済化を急ぐ革命第二世代のベトナム。アダムスミスの言う“レッセフェール”の自由放任、弱肉強食の市場経済とマルクスのすべての労働が記号化され、単純化され、誰にもやりたい仕事を用意され、能力に応じて働き、必要に応じて取る予定調和的な“市場経済”（敢えてこう言おう）との間に、中国の、そしてベトナムの“社会主義市場経済”があり得るのか？その先にソ連の計画経済とは違って、マルクスの唱えた理想の社会主義社会が実現するのか？社会主義革命なんて“民族独立のための方便”さ、“新しい酒は新しい皮袋に”だよ！死んでも働かされるホーチミンが穏やかに語るのが聞こえた気がするのは、耳の衰えであろうか。

◎香港で京美人に会うも荷物が来ない！

安いパックスツアーだったので直行便には乗れず、香港乗継のキャセイパシフィック便になる。これが幸い、京都への里帰りから関空発キャセイ便でバンコクへ向かうバーンサンラックの藤井由美さんと乗り継ぎ時間が重なり、娘と一緒に香港空港で久しぶりに対面。真っ黒に日焼けした京美人と別れてハノイに到着、出国手続きを終えても荷物がターンテーブルに現れない。初めての経験だ。こんな時は親より多少英会話ができる娘の出番だ。荷物は香港に置き去りらしい。明日ホテルに届くというが、今夜の着替えがない。ワンセット別のバッグに入れなかつのを後悔するが、仕方ない。下着一式買えばいい、どうにかなる。ホテルに着いて夜のハノイに下着の買出しに繰り出す。

ホテルの周りを探す。賑やかな商店街で婦人服店は沢山あるのに紳士物の店がない。コンビニもない。たまに紳士服店をみつけても下着はない。小一時間、9時近くなって店も閉まり始める。東京の感覚で何時でも、何処でも、何でも買えると考えていたのは間違いらしい。少し焦る。今でこそ毎日風呂へ入って下着も替えないと気持ち悪いが、学生の頃は一週間も風呂に入らず、下着も替えなくても気にならなかった。諦めかけるとようやく男物の下着も売る店が見つかる。

一軒見つかる強気になり、前開きのパンツを探すがない。ランニングもない。仕方ない、ノースリーブのTシャツが4米ドル、綿の靴下が2ドル、パンツが2枚組で4ドル計10ドルというのを値切って9ドルで買う。ガイドブックには先ず半値からとあったので頑張るが、時に利あらず。パンツの色もグレーで、もっと色めいたのが欲しかったのだが。

◎我は海の子・・・ハロン湾で泳ぐ

陶芸のバッチャン村や少数民族アカ族の村へも足を伸ばし、海の桂林、ハロン湾にも遊ぶ。我は海の子、鮑は無理でもサザエくらいは！海パンと水中眼鏡を用意する。雨に煙る湾内には緑の島々が重なり確かに景色はいい。遊覧船には●親娘の他にはK大同期の都市公団と旧宇宙開発事業団の若い女性職員が二人。それぞれの幹部には●が世話になっている方も多く、海老や蟹をたらふく食べ、地ビールを飲み盛り上がる。

水着を持参したエリート女性達も水面に落ちる雨脚を見て二の足を踏む。娘も意外と常識人だ。ここは一人で頑張るしかない。駒場の学生時代、戸田の寮に泊り、今は弁護士の同級生の西内聖君と泳いだ梅雨の西伊豆の海の冷たさに比べれば、ここは熱帯だ。船べりから勢い良く飛び込む。水の冷たさはどうということはない。が、緑色に濁って1メートル先も見えない。我が故郷岩館の海水浴場の、防波堤で囲まれへドロが溜まる海浜プールの水もひどいが、ここはそれ以上だ。道理で誰も泳いでいない筈だ。

水を得た●は調子に乗って潜り、故事に倣い水を含んで口から噴出す。ハロンとは龍が降り立った所の意だという。●から龍になった気分潜っては水を噴出す。

◎元気だね！奇跡だね・・・腸は直っても肝臓ガタガタだよ！

6月の頭、隔月に一回の診察で三楽病院の主治医の阿川先生に診てもらおう。ハロン湾で汚い水を飲んだんですが？コレラは塩分に弱いから大丈夫。それより大腸菌が沢山いたと思うよ。O-157のような。あ！そうですよね。潜伏期は過ぎてますよね。前回休肝日をとということだったので5日だけ飲まなかったんですが、2日連続でないといけませんか？1日でもいいけど、毎週休ませないとね。腸は治っても肝臓がガタガタになりますよ！

前回の東大三鷹クラブの講演会で一緒になった三楽病院の河野名誉院長(S30年東大三鷹寮入寮)には「元気だね！奇跡だね！」と言われたが、データの「胃がんと大腸がん」(岩波新書)の「大腸がんステージⅢb・・殆ど治癒する見込みなし」というのも、あながち誇張ではないということだ。術後1年以上経ってこんなに元気だから、もう1年はどうにか行けそう。術後2年無事なら再発はなし、5年で完治ということで、データの例外に該当することになるが、敵は酒屋にあり！しかも別の病気ということか。

退院直後から飲んでここまで元気に来たのだから、飲んではいけないと神経質になってストレスを増やすのもいけないが、週に一回の休肝日はどうにかしよう。目標？が決まってスッキリする。週一の休肝日に決意を新たにするというのも意志薄弱で情けないが、これが呑み助というものか！？

◎高橋社長逝く

ハノイ滞在中に、高橋カーテンウオールの高橋治男社長が亡くなる。膵臓がんの手術後6年ほど、糖尿病も併発して最近は大分痩せ、階段の上り下りもつらそうだったが、4月初めの営業会議にも出席されていた。膵臓がんで6年近く存命というのは驚異的な頑張りだが、享年59歳、早世である。50歳で高橋を退社、エコビジネスの起業に失敗、同社の営業顧問にいただいた後も、毎月1回の営業会議に出席、顔を会わせた。昨年大腸がんを手術後は、元々余り飲まない社長から、飲み過ぎはいけないよと注意もいただいた。顔を会わせる度、毎晩酒を切らさぬは太って血色もいいのに、節制に努める高橋社長が痩せて血色も悪くなっていくのには心苦しいものがあつた。

40歳でサラリーマンを始めるまで、「定職」に付いたことはないが、受験産業でのアルバイトの傍ら30歳まで学生を続ける間に結婚し、子供もでき、中古の小さなマンションも買うなど、特に困ることもなかった。だが高橋を飛び出し路頭に迷った時は大分参つた。バブル崩壊直後に買い換えた住宅のローンが月20万円、子供二人もまだ学生だが、50歳過ぎてのサラリーマンは難しい。だがピンチはチャンス。機会があればと思っていた営業コンサルタントで独立しよう。高橋社長に相談すると快く営業顧問にしてくれ、毎月まとまった活動費をいただく。続いて寮の高橋英雄先輩(S34年入寮)のいた日本ビクターの営業顧問にもしていただき、建築関係のメーカーを中心に顧問先も少しずつ増え、情報仲介業もどうにか軌道に乗る。偏にのネットワークと営業スキルに価値を見出していたら、高橋カーテンウオールの営業顧問として一步を踏み出せたからである。

景気には明るさが見えて来たが、建築業界はまだまだ。雇用も増え、消費も活発になってようやく工場や店舗、事務所、ホテルなどの建築が始まる。それに最近の高層ビルはガラスの外壁が増え、タイルや石打ち込みのコンクリート製外壁=PCカーテンウオールは押され気味。テロや震災などの安全面、空調などのエネルギーコスト、飽きの来ないデザイン性、イニシャルコストとメンテナンスコストの安さからもPCカーテンウオールが優れるが、ガラスのシャープでハイテックなイメージが好まれるのである。この難しい時期にご子息の高橋武治社長が跡を継ぎ、叔父さんの高橋敏男専務が会長に昇格した。新社長は東大法学部での後輩で、第一勸銀を経て高橋カーテンウオールに入社、アメリカに留学、MBAも取得した新しい感覚の経営者だ。先代社長のご恩に報いるためにも、これまで以上に頑張らなければ。高橋カーテンウオールへの読者の皆様の変わらぬご支援をお願いして、先代社長への追悼に代えたいと思います。合掌。

◎カンパとパソコン持って黄金の三角地帯のバンブーハウスへ



タイ北部、チェンマイまで車で3時間、更にチェンライまで1時間の農村にある就学支援施設バーンサンラック（愛を編む家）の“家族”。右端の藤井由美さんにアシスタントと5人（日タイ混血のシンちゃんと少数民族アカ族の小さい子4人）の子供達です。

前号に報告の方以外に、山口修（S45年入寮）、今木甚一郎（S39年入寮、東京圏駅ビル社長）、阿部富士江（陶芸家）、金谷暢夫（三鷹クラブ）、佐藤卓夫（榊建研）、水木初彦（神奈川新聞社長、高校・大学の先輩）、小森良子（学生時代のバイト先）、立野省一（Eクラス同級生）等の皆さんのカンパに🍀の分も加え、28万円届けました。土地提供者でもある写真奥のアシスタントの月給が1万5千円とのことで、大変助かります。帰国後、中国植樹ツアーで一緒の秋田の高橋元さんからいただきました。ありがとうございました。

山口君が一緒に行こうとのことでしたが、人材紹介会社の重役の仕事が忙しく、結局🍀の一人旅でした。詳細は次号に譲りますが、椰子の葉の屋根の下で、蚊帳を吊り、桶の水で行水し、一菜一汁のシンプルな生活を子供達と楽しんで来ました。子供達は勉強、遊び、畑仕事と元気に楽しくやっていました。尚、カンパは下記口座をお願いします。

郵便振替口座番号00130-7-409212 口座名称バーンサンラック応援支隊

◎北京は砂上の楼閣？・・日中水フォーラムIN北京（「黄土高原便り」より）

高見邦雄（緑の地球ネットワーク事務局長）

中国共産主義青年団中央委員会、中華全国青年連合会の主催で、4月20日から22日まで、日中水フォーラムが、北京で開催されました。新聞報道で初日の参加者は1500人。大成功です。北京の水問題の深刻さは、私の推測を、はるかに超えるものです。水フォーラムでは、私も、発言の機会をもらいました。以下、その要旨です。中国側からも、拍手をもらいましたから、問題に気づいている人も、少なくないのでしょう。

緑の地球ネットワークは1992年から山西省大同市の農村で緑化協力事業を継続していますが、一帯から底がぬけたように水がなくなっています。最初に気づいたのは、県境に位置する辺鄙な農村です。井戸や湧水が涸れ、何キロも離れた他の村にもらい水に通います。見かねて2つの村で井戸掘りに協力し幸い水は出ましたが、深さ176メートルと182メートル。村人は大喜び、お年寄り泣きながら「生きている間にこんないいことに出会うとは思わなかった」と、私の手を放しません。もらい泣きしました。井戸掘り隊の話が、また衝撃的でした。「県境の一帯は例外なく水がなくなっている。水のない暮らしの困難さは自分たちが一番よくわかるが、そういう村は素寒貧で、井戸を掘る金なんてない。井戸掘りの注文も少なく、私らの賃金も遅れどうにもならない」。すると、井戸掘りは緊急避難にはなっても、根本的解決にならない。水不足は井戸で解決できるレベルを超えています。

かつて、21の村の900人を対象にアンケート調査したことがあります。1人1日の水使用量は平均23.8ℓ、少ない村は15.6ℓ（日本の水洗トイレが1回10ℓ）。水が少ない村ほど「最近の減少が激しい」といいます。次に気づいたのは、大同中の河という河、ダムというダムが干上がったことです。大同中央部を桑干河が横切りますが、最後に流れをみたのは1997年夏で、それ以後、ありません。はなはだしきは昨年9月、応県でこの河を渡る時、川底の全面がトウモロコシ畑になって、水の流れる余地が全くありません。地元の農民は、水が流れてくることを期待も恐れもしていないのです。丁玲の有名な小説に『太陽は桑干河を照らす』がありますが、これでは『太陽はトウモロコシ畑を照らす』です。

都市の水不足も深刻です。大同の炭鉱職員住宅では水道の給水時間は1日わずか20分。バスタブに貯める100リットルが、4人家族の1日分です。地下水位も急速に低下し、地元紙は「毎年2~3メートルも低下しており、2008年には完全に涸渇する」と報道しました。広い中国ではそういう地方もあって不思議ではないが、大同は北京の水源地です。桑干河は官庁ダムに注ぎますが、官庁ダムは、密雲ダムに次ぐ北京の水ガメです。1か月ほど前、大同にいく途中で官庁ダムをみました。水際が1キロ以上も後退しています。干上がったダム湖の底が畑に変わり、春耕の最中でした。リンゴやブドウの果樹園、柳の苗畑もあり、水際に近いところに貝の死骸が転がり、水草が腐っていました。農民の話では「この5、6年の水位低下が激しい」とのことです。

昨年の国慶節直前、大同の冊田ダムの水門が開かれ、5千万トンの水が官庁ダムに流されました。その時「首都を守るのは光栄な任務だ」と強調されましたが、大同の水不足は、ずっと深刻で、大同からみれば、北京の水の使い方はぜいたくです。大同市民がどんな思いであの5千万トンを見送ったか、北京の人はわかるのでしょうか？日本からみる北京は大発展・中国の頂点で、通過するたびに変貌に驚きます。しかし、大同から見る後ろ姿の北京は、「砂上の楼閣」です。中国側の報告も沢山あり、節水その他、皆さんの努力に敬意を表しますが、今のような勢いで北京が膨張を続けるならそれも限度のあることでしょう。

こんな話を、外国人の私がするのは、非常識、無礼極まりないことは承知です。しかし、毎年100~120日、大同に滞在する私は、この席に立った以上は、話さない訳にはいかない。私たちの本業は植樹ですが、水のプロジェクトにも取り組んできました。井戸を掘ったことは既に話しました。それから拠点の環境林センターで小さな汚水処理施設を作りました。ここには20ヘクタールほどの苗圃があり、苗作りには水が必要です。日本の外務省草の根無償資金協力の支援で井戸を掘りましたが、地下水位が急速に低下する中で無神経に水を使う訳にはいきません。先ほどの炭鉱住宅の生活汚水を浄化して使うことにしました。

大阪産業大学の菅原正孝教授が手弁当で現地に来てくれました。採用した技術は土壌浄化法です。25メートルプールほどの簡単な設備で、1日250トン処理できます。処理水で金魚を飼ってますから、灌漑用水としては十分なレベルです。沢山の人が見学に来て、「こんな簡単な設備でいいなら、すぐにでも作りたい」といいます。しかし実際に運転すると、さらに改善点がでてきます。今それに取り組んでいます。灌漑用に計画したため、零下30度近くになる大同では冬季の運転はできませんが、可能になれば用途は更に広がります。人口の密集する都市では大規模施設が有効でも、農村部では汚水の発生源近くに小規模施設を数多く建設し、処理水を河に流す方が効率的で、河もよみがえります。

この成功に味をしめ、昨秋から炭鉱汚水の浄化実験にとりかかりました。大同は中国最大の石炭の街です。坑道を深く掘れば当然地下水が出ます。その水には鉄、マンガン、その他が含まれ、そのままでは使えないので捨てられます。石炭1トンを掘ると平均2.5トンの水資源が破壊されます。最近その水を浄化して水道用水にするプロジェクトが稼働しました。逆浸透法によるもので多額の資金を要し、豊かな大炭鉱では可能でも、零細炭鉱では使えません。私たちが生物処理です。オモチャのように簡単な設備ですが、1日あたりの処理量70トン、800人の村には十分すぎる量です。運転開始後3か月で、水道水の基準には距離がありますが、洗濯、浴用などには問題ないレベルに達しました。炭鉱労働者はまっ黒になってでてきますから、風呂に入れば助かるはずですが、ところが実験は3月に中断されました。炭鉱の廃止が決まり、通告の翌日、上部の命令で入り口を封鎖されたのです。無念です。地元の要求も強いので、なんとか再開したいと願っています。こんなトラブルは地方ではしばしば発生します。過去にも経験しました。日本側の皆さんにはそのような事態で慌てないよう、諦めないよう、お願いします。中国側には、このような問題をできるだけ早く解決するよう要望します。

たいていの社会問題は、辺境の貧しいところで、最初に顕在化します。どこの国、どこの社会でもそうです。環境問題、水問題は其の最たるものです。そんなところに常に目が向けられる社会であれば、問題が早く認識され、軌道修正が容易で、負担も軽くてすみません。中国には「水を飲む時は井戸を掘った人のことを忘れるな」という格言があります。いい言葉です。加えて、水を飲む時は上流のことを考えてほしい、逆に下流を流す時は下流のことを忘れないでほしいと思います。

◎黄土高原・秋のワーキングツアー

例年より1か月遅れの8月下旬。大同はすっかり秋、植樹の最適期です。農村の人たちとの共同作業、農家へのホームステイ、GENの協力拠点の見学と盛りだくさんの内容です。北京、上海、3億人の中国のみで13億人の中国を語るなかれ！もう一つの中国あり！

▼期間＝2004年8月23日（月）～30日（月）

▼費用＝一般175,000円、学生＝165,000円

（中国国際航空利用・関空発着国際航空運賃、国滞在費、GEN年会費を含みます）

申込締切：7月16日（30人の定員に達し次第締め切ります）

問い合わせ、申込みは「特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク（GEN）」まで

〒552-0012 大阪市港区市岡1-4-24 住宅情報ビル5F

TEL06-6576-6181 FAX06-6576-6182 E-mail gentree@vc.kcom.ne.jp

URL <http://homepage3.nifty.com/gentree/>

ペリー来航と近代日本開国・・・第55回三鷹クラブ定例懇談会

今回の講師は、34年入寮の羽田壽夫氏（「横浜黒船研究会」代表）です。

氏は、昭和15年西宮市に生まれ、大阪府立北野高校を経て、34年4月、東大理科一類入学と同時に三鷹寮に入寮、昭和38年工学部機械工学科卒、同年三菱重工(株)入社、原動機事業本部など主として機械分野で活躍された後、東電工業(株)に転じ、昨年6月会社生活を終えられました。退職直前の3月には、事業用ボイラー開発の論文に対し、東大総長より工学博士の学位を授かる等、旺盛な研究意欲には頭の下がる思いですが、現在は「横浜黒船研究会」の代表を務める傍ら、専門の機械学会はもとより、書票協会、浮世絵学会などでも幅広く活動されています。

黒船来航の舞台横浜は、私の勤めている都市基盤整備公団が昨年3月に本社を東京九段から移転させた先でもあり、毎日の勤務地です。横浜は、格調ある歴史文化の香りと近代都市の華やかさを併せ持った、仲々魅力ある街だと実感していますが、この3月に東横線が延伸されて、みなとみらい地区を経て、馬車道、中華街、元町まで乗り入れた効果もあって、平日でも入り込み客が増え、ちょっとした横浜ブームを呈しています。しかも今年はペリー提督が横浜に上陸し、日米和親条約を締結してから丁度150年目に当たりますので、日米交流150年の記念行事が横浜市を中心に数多く開かれ、又予定されております。その中で羽田氏が代表の「横浜黒船研究会」は、メインイベントを次々と企画していて、去る4月27日には記念シンポジウムを主催し、羽田氏はパネル討論のコーディネーターを務めて、大成功を収められましたが、引き続きこの夏には記念の展示会や公開講座を開催する予定だそうです。

羽田氏は私と入寮同期ですが、出身高の大阪北野高校では一年先輩に当たり、三鷹寮では同室か隣室でしたが、当時からあの堂々たる押し出し、緻密な頭脳、抜きん出たディベート力そして実行力、どれをとっても圧倒される思いで、爾来氏の前ではいつも小さくなっていますが、今回の講演も楽しみにしながらもひたすら拝聴するつもりです。黒船の研究は、氏の曾祖父が黒船警備のため新潟柏崎の在椎谷から横浜にみえた時の見聞に興味を持たれたのが動機だそうで、自分自身も30年前から横浜に移り住み、文字通りライフワークとして取り組んでこられたものです。今回はその一端が披露されるわけで、ペリー提督来航を中心とする対外文化交流の歴史や僅か1000人程度の寒村だった横浜が、150年で350万人の日本一の市となった原点について伺えると思います。多数のご参会をお待ちしております。(昭和34年入寮 伴 襄 記)

日 時 平成16年7月22日(木) 18時30分～21時

会 場 学士会館本館(千代田区神田錦町3-28 TEL:03-3292-5931)

会 費 5千円(会場費、夕食・ビール代、講師料、通信費等込み、別途二次会予定)

申込先 平賀俊行 FAX 03-5256-0458 TEL 03-5256-0455 (株)国際研修サービス

干場革治 FAX 03-5689-8192 TEL 03-5689-8182 (有)ティエフネットワーク

e-mail: tfn-hoshiya@blue.ocn.ne.jp

◎☛版カモメール当選番号は下2桁43番です

封筒の表の番号下二桁43番の方には、追って故郷の魚の一夜干しセットを差し上げます。☛もと頼んだのですが、5月、8月に、それも一日数匹しか獲れないとのこと、☛は入っていません、悪しからず。読了、ありがとうございます。